

自己調整学習者の育成

2023・9・4 重枝 一郎

正確な未来予測は誰にもできない。意図的に変化を起こそうとしてもそうはならない。結果としてそのような社会状況になっていたと考えるようにすることが大切だと思う。その時々求められるのは到達目標ではなく、向上目標的な不断の改善である。新しい道具は、その道具の特性を生かした活用法となって初めてより良い未来を実現するうえでの必要不可欠な道具となる。

本校も生徒一人一台タブレットを始めて2年目に突入する。それぞれの先生、教科等で取り組みを振り返ってみてほしい。

先生方は、一人一台情報端末の活用において、「個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させていくこと（2021中教審「令和の日本型学校教育」より）」に取り組んでいる。

個別最適化な学びでは、「指導の個別化」と「学習の個性化」に大別される。「指導の個別化」は、生徒の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法、教材や学習時間等の柔軟な設定を行うことである。「学習の個性化」は、生徒の興味・関心、キャリア形成の方向性等に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することである。

どちらも最上位の目標は「生徒が自らの学びを調整しながら取り組む」ということである。これを「自己調整学習ができる学習者」という。この「自己調整学習者」のプロセスが「メタ認知の育成」にもつながる。つまり、生徒が学習方法を自ら試したりするようにし、自らで工夫改善をしていく。「メタ認知の育成」は、生徒が自ら学び方を選択しないと育まれにくく、発揮されにくい。

このように情報教育のこれからは、「自己調整学習者」の育成を目指すことになる。経験的な話を一つ。

以前、市教委で情報教育を担当していたとき、体育科のグループ研究を指導したことがある。その実践である体育のマット運動の授業の様子である。

『生徒の情報端末にはGoogleスプレッドシートが起動され、後転を練習するためのステップが示されている。そしてそれぞれのステップには教材やYouTube等の動画がリンクされており、生徒は自分が取り組む課題（つまりスキの段階）が今どこなのかを把握した上で、お手本動画の視聴 → 練習（撮影） → お手本動画と撮影した動画を確認 → 練習、というサイクルで取り組んでいく』

最近のスポーツ選手は、自らの動きを一回一回動画で撮って確認することは当たり前になっている。これは、技術向上もそうだが、間違った動きをしすぎての怪我の防止にもなる。

『できるようになったら次に進み、同じサイクルで練習に取り組んでいく。この授業は、教師が生徒たち自身で調整しながら学習に取り組めるようにしている。そして支援が必要な生徒をより重点的に指導していた』

授業中、よく「わかりましたか?」「はい」という生徒とのやりとりがある。生徒はざっくり的に「はい」と答えている。しかし私たち教師は、生徒が「はい」とは言ったものの、あまりわかっていないことを山ほど経験している。私たちは生徒の「わかる」や「できる」の前には、いくつのステップがあるのか想像しなくてはならない。私たち教師のこの理解が「自己調整学習者」の育成につながる。一般的に、学習目標の細分化が上手な教師は、総じて発問の細分化も上手になる。